

「市民」とは誰か：広島市現代美術館のChim↑Pom「ピカッ」事件が残したもの。

毛利 嘉孝

Chim↑Pomの広島の「事件」を聞いた時に、なんとも言えずいやな感じがした。作品や「事件」に対してではない。この「事件」を含めた現代美術を取り巻く今の状況に関してである。「事件」からおよそ一年が過ぎた。いつの間にか「事件」そのものは風化しつつあるようにも感じられる。けれども、私は最初に受けた「いやな感じ」をいまだに払拭することができない。

「事件」について、念のために簡単に振り返っておこう。昨年(二〇〇八年)一〇月二日、広島上空にカタカナの「ピカッ」という三文字が現れた。アーティスト・ユニットであるChim↑Pomが小型飛行機のスモークを使って作品制作のための撮影素材として描いたのだ。Chim↑Pomは、広島市現代美術館「Re-AC T新・公募展2007」の美術館賞を受賞し、同美術館で展覧会が予定されていた。今回の「ピカッ」はその展示作品のための素材である。

突然現れた「ピカッ」という文字は、事前に告知をしていなかったこともあり、その直後から市役所や新聞社には問い合わせが相次いだ。翌日「ピカッ」という文字に対して「不快だ」「気持ち悪い」と感じた「市民」の声を「中国新聞」が写真とともに伝えたことから、一気に騒動となる。こうした抗議を受ける形で、一〇月二日にChim↑Pomは謝罪会見を行う。結局広島市現代美術館での展示を「自粛」という形で展覧会を中止することになった。

けれども、これで「事件」が終わったというわけではない。ネット上では、今回の問題について活発な議論が交わされた。有名巨大掲示板では、現代美術のトピックでは珍しいほどにChim↑Pomに対する批判や罵詈雑言が溢れた。『美術手帖』をはじめいくつかの雑誌で

は特集が生まれ、美術批評家や編集者、キュレーターなど少なからぬ美術関係者がこの事件に関してコメントを行った。

今年に入ってこうした議論を総括した書籍である『なぜ広島の空をピカッとさせてはいけないのか』(以下、『なぜ』と表記)(Chim↑Pom・阿部謙一編、無人島プロダクション発行、河出書房新社発売)が出版された。広島市現代美術館に出品されるはずだった作品は、結局ビデオインスタレーションとして完成し、出版に合わせて東京で展示された。Chim↑Pomは、こうした「事件」全体を彼らの制作活動の一つに組み込んだし、その意味では必ずしも悪い結果ではなかったかもしれない。一応、一件落着である。

けれども、私の「いやな感じ」は今なお取り除くことができない。それは、いわば日本の現代美術を取り巻く一種の膜のようなものである。どうにも取り除くことができない薄い膜が、一連の議論を覆っており、結局のところその「膜」がこの間の議論によって取り除かれたり、破かれたりすることなく、一層強固なものとして現代美術全体を覆いつくしているように思えるのだ。それは何か？

『なぜ』を読んだときに困惑させられるのは、結局のところこれがなぜこんな「事件」になったのかわからないことである。もちろん、新聞に掲載された写真を見て、なんともいえない不安な気持ちをした人がいたかもしれない。こどものイタズラ書きのような「ピカッ」という三文字と、Chim↑Pomというユニット名(テレビのニュースではこの冗談じみた名前が音読されることは最後までなかったという)、そしていかにもイマドキの若者

風の彼らの風貌を見て、真剣に反核運動を行ってきた活動家の中に違和感を覚えた人がいたことは想像できる。

けれども、今回の一件は、たとえば広島市の講演会における反核運動や平和運動に対する元航空幕僚長の田母神俊雄のトンデモ発言と比較すれば、他愛もない話である。事前の協議不足と地元とのコミュニケーションの欠落が最大の問題であって、そもそも平和運動と対立しているものでもない。『なぜ』の中でも被爆者団体の方と対談しているが、(少なくとも表面的には)拍子抜けするほど温かく迎えられている。

なによりも「ピカッ」というスカイライティングも、作品そのものではなくあくまでも素材にすぎなかった。とすれば、そこで拙速に判断せずに、予定通り展示をして、完成した作品をもって市民の判断を仰ぐべき事柄だったはずだ。必要に応じて作品の制作意図を発表してもよかった。いずれにしても、展覧会を「自粛」する必要はどこにもなかったのである。

『なぜ』の最後に収められた、Chim↑Pomのリーダーの卯城竜太の「Chim↑Pomのピカッ騒動記」によれば、謝罪と自粛に対して重要な役割を果たしているのは、「事件」に対する広島市局長の批判的コメントを

掲載した「中国新聞」と広島市現代美術館館長と副館長である。この中で二人は美術館の責任者ではなく、被爆者と被爆者二世の代表として登場している。いつの間にか市民の「代弁者」に行政がすりかわっているのだ。結局「市民」を僭称する公的機関とマスメディアのタッグによって、Chim↑Pomは「謝罪」させられ、展覧会は「自粛」となった。その結果、現実の広島市民の多くは、問題となった作品を見る機会さえも奪われてしまった。それは、批判の名を借りた一種の「事前検閲」として機能したのだ。

広島市現代美術館のChim↑Pomの「事件」を例外とみなすと、今起きていることの本質を見誤ることになる。このところ「市民」を盾にした公立美術館の情報統制は、より巧妙な形で、だが確実に強化されつつある。

今年(二〇〇九年)四月から七月にかけて沖縄県立美術館・博物館で開催された展覧会「アトミックサンシャインの中へin沖縄—日本国平和憲法第九条下における戦後美術」では、展示予定だった大浦信行の版画作品「遠近を抱えて」が、県教育委員会や県立博物館・美術館などからの「教育的観点から配慮してほしい」という

要請によって展示が中止された。「遠近を抱えて」が昭和天皇の写真をコラージュした作品であることが問題とされたのである。

「遠近を抱えて」は、八六年に富山県立近代美術館が作品を購入しようとした際に、議会が問題とし、公開が取りやめになるばかりか図録の破棄まで行う騒動となったことがある作品である。逆にいえば、日本美術史と天皇制をめぐるひとつの臨界点をはからずも示すものとして、この展覧会の重要な要素だったはずだった。にもかかわらず、ニューヨークに始まり、東京を巡回したこの展覧会は、沖縄では、館長のいう「教育的観点」により「遠近を抱えて」は事前に排除されてしまったのだ。「ピカッ」事件ほど話題にならなかったこともあり、多くの市民は問題が存在することさえ知らされなかった。

この「アトミックサンシャイン展」における「遠近を抱えて」の排除とChim↑Pomの「ピカッ」事件は、その芸術作品としての性格は異なるものの、「事件」の構造としてはよく似ている。いずれも「市民」の良識や教育的配慮を盾に、美術館の責任者が展示の中止を決定するというものなのだ。形式的には、「自粛」や「合意」という形式を取るのだが、そこには対抗できないような強制力が働いており、実質的には、事なかれ主義が生んだ「事前検閲」とでも呼ぶべきものである。

けれども、行政が排除の根拠としている市民は、行政やメディアが都合よく生み出した受動的な「市民」にすぎず、その「市民」からは行政の批判的市民はもちろん、多くの美術愛好家やアーティスト自身までもあらかじめ排斥されてしまっている。「ピカッ」や「遠近を抱えて」はまだ問題が明るみになっただけかもしれない。公立美術館の日常業務において、「市民」の峻別を通じた「事前検閲」のネットワークはますます巧妙に張り巡らされつつある。

近年、美術館の活動において「市民」はますます大きな役割を占めつつある。美術館の「市民」の濫用は、何かを排除したり、抑圧したりする時のみに行われているのではない。「市民参加」という名の下に行われる参加型のアートプロジェクトや各種のアウトリーチ活動、ボランティアといったさまざまな形で、市民は巻き込まれている。こうした活動においても確実に「市民」は峻別されている。

限られた人に占有されてきた現代美術を、より広く多

くの市民に開放すること自体は正しい。けれども、その際に「市民」として何が排除され、何が再編されているのかを慎重に見極める必要がある。

「ピカッ」事件をめぐる、これが「芸術作品」としてどうなのかという議論がしばしば見られた。現代美術の現在形として評価する人もいれば、道徳的ではない、表現として幼稚だという批判もある。私自身そうした議論に入りたい欲求に駆られるが、その前にあえて一歩踏みとどまって、展覧会が中止となり、多くの広島市の市民はそうした議論に参加する機会さえ与えられなかったことを問題にし続けなければならない。今現代美術にとって本当に必要なのは、正しい批判力を持った市民なのだから。